クライストのヴュルツブルク旅行：クライストと自然

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): クライスト, 自然観, エロス, 生産力 キーワード (En): 作成者: 深見, 茂 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2004902

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	クライストのヴュルツブルク旅行 : クライストと自然
Author	深見, 茂
Citation	人文研究. 27 巻 2 号, p.76-97.
Issue Date	1975
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

クライストのヴュルツブルク旅行

—クライストと自然—

深　見　　茂

1

以下の小論は，1800年当時，つまり22－23歳ごろのクライストHeinrich von Kleist(1777－1811)にとって,自然がどのような意味を持っていたか[1]を，同年，彼が企てた，いわゆる「ヴュルツブルク旅行」と呼びならわされている謎の多い体験の分析を通じて明らかにしようとするものである。自然という主題は，もとより，18世紀においては，ドイツのみならず，全ヨーロッパ精神界の中心的関心事の一つであったけれども，この小論は，そのような主題との直接的なかかわりあいという視点からクライストを攻めようとするものではない。むしろ，結論部においても明らかになる通り、主眼はあくまで，詩人クライストの作家研究への寄与であり，論述もこの視点からの論究の域内にとどまるものであることを、ここでことわっておかなければならない。するとその場合，当然，この小論においての自然という言葉の概念規定が問題となろうが，今は仮にクライスト自身が、当時の書簡の中でみずから，Natur，又はその範疇内の言葉を用いて表現しているもの，といった程度の規定にとどめておき，論を進めるうちに次第次第にその実体を，より厳密に明らかにしてゆくという方法をとりたいと考える。

なお，ヴュルツブルク旅行におけるクライストの自然体験そのものについての一般論としては，今日まで大まかに言って，二つの方向の解釈が普通，行なわれている。すなわち，その一つは、未だ啓蒙主義的教養観念の世界に生きていたクライストにとっては，この旅行での自然体験もあくまで人間生活の比喩としての自然把握であった，つまりアレゴリーとしての自然観にすぎなかったとするものである[2]。他は，まさに同じ現象をとらえて逆に，いや，すでに道徳的自然観が説かれているのであるから，ここにこそ啓蒙主義を越えてルソーへと傾倒してゆくクライストの出発点があるとするものである[3]。更に，これら二つのほか，フリッケG.Fricke以来，一世をふうびしたクライストの実存主義的解釈の流れを受けて，イデーH.Ideのように，この旅行に

おいて，すでにクライストのexistentiellな生き方が，その自然把握の中にもあらわれているとする方向の主張もある[4]。いずれも，それを主張する論者たちがとる立場からの解釈であり，それぞれそれなりに首肯され得るものである。しかしながら，この小論は，それらとの対決から出発しようとするものではない。それらを参考とはしつつも，とらわれることはせず，あくまで筆者も又，おのれの立場からおのれの目をもって，改めてクライストの旅を追ってみたいと思うのである。

2

まず，クライストのいわゆるヴュルツブルク旅行の日程のあらましを，基本的な事実にのみしぼって簡単に描写しよう。(若干の，細部にわたる補足的説明は注にゆずる。)

クライストはそれまで，代々軍人であった家柄のしきたりに従って，15歳の時から勤務していたプロシャ近衛連隊を，1799年4月に退官，故郷の町フランクフルト・アン・デル・オーデルFrankfurt an der Oderの大学に三ゼメスター学んだのちの夏，すなわち，1800年の8月，しばらく就職問題などのため滞在していたベルリーンから一週間ほど帰宅したのち，8月14日，家族の者にも，婚約者にも目的を告げることなく，単身，再度ベルリーンに行く。なお当時クライストは，未だ作家としての具体的活動には全く入っていない。さて，それから友人のルードヴィヒ・フォン・ブローケスLudwig von Brockes[5]という人物をパーゼヴァルク近郊のコーブレンツKoblentzまで迎えに行ったのち，彼とつれだって最初ヴィーンへ向う予定でベルリーンを出発する。その際，ポツダムまではクライストの婚約者の兄で，クライストの戦友でもあったカルル・フォン・ツェンゲKarl von Zengeが同行している。途中ライプツィヒ大学で入学手続をとって同大学学生の身分を得る。ただし二人とも偽名を使った。すなわち，ブローケスはベルンホフBernhoffという名を使い，クライストはクリングシュテットHeinr. Berendt. Guil. Klingstedt[6]と名のった。さて，ドレースデンまで来たところで，急遽，目的地を変更，ヴュルツブルクに向い[7]，9月9日ごろ，同市に到着，この町の外科医ヨーゼフ・ヴィルトJoseph Wirthという人物の家に下宿，同年10月27日，5日間の旅程を経て，ヴュルツブルクからベルリーンに帰着した。

以上である。この8月14日から10月27日までの約2ヶ月半の旅行のことを研究者たちはクライストの「ヴュルツブルク旅行」と名付け，彼の生涯に重

要な転機を画したものとして，今日までさまざまの角度から論究の対称としてきたのであり，その代表的な方向が，はじめにも少し触れた通り，この旅行におけるクライストの自然美への目覚めと，その描写力，すなわち詩人の使命への目覚めに注目しようとするものである。

3

すでにヴュルツブルクへ向う途中から発せられた書簡にも，のちに例証するように，すぐれた描写が散見されるが，その頂点をなすものは，なんといってもヴュルツブルク滞在中の書簡であろう。尤も，この時期前後のクライストにおける自然美の称賛や描写は，他にも多く残っており（たとえば1801年7月に書かれた書簡におけるライン描写など），従ってわれわれが問題としているヴュルツブルク旅行の場合も，たとえば，ティークL.Tieckやヴァッケンローダー—W.H.Wackenroderらが，南独に旅して，北方にはない自然美と文化におどろいたのと共通の，プロテスタント的プロシャ文化を生んだ厳しい自然の子の，カトリック的南欧文化を生んだ豊饒な自然への憧憬，といった一般論からも説明され得るものであろう。しかしながら，そればかりではない，クライスト特有の自然の受けとり方も顕著にあらわれている。その特徴を示すために，最も著名な個所を三つ例示しよう。

特に一つの光景が大変わたしの目をひきつけました。すなわち，マイン河は一直線に橋の下をぬけて流れ去ってゆきます。矢のように速く，まるで河は，おのれの目標をすでにとらえてはなさず，目標に達するためには何物の阻止をもゆるさず，いらだたしげに，最短距離で目標に到達しようとしているかのようです。——ところが一つのぶどう畠の丘がマイン河のこの猪突猛進の道を曲げてしまうのです。それも，おだやかに，しかし確固とした意志をもって。丁度，一人の妻が夫の激しい意志をたしなめるのにも似て，丘はマイン河に，気高い不変の態度で，大海へと河を導くべき道を指し示すのでありました。——すると河はこの控え目な警告を尊重し，このやさしい指示に服従し，目標を性急に目指すことを断念し，ぶどう畠の丘に穴をうがってうちやぶってしまうことはせず，おだやかな流れとなって丘を迂回してゆくのでありました。丘の花咲くふもとに接吻しつつ。
—(An Wilhelmine, 11. Oktober 1800[8])

丘はゆるやかな勾配をなして下り坂となり，その底に町がよこたわっています。町の背後には両側から，半円形をなしてやまなみがせまり，互い

に親しげに近づいています。それはまるで，久しいそのかみに仲たがいをしてしまった二人の旧友が，再び今，あいまみゆるかのごとくであります。——ところがマイン河が，まるで苦々しい過去を思い出させるかのように両者の間にわってはいり，二人はせっかくの心もゆらぎ，どちらも，まずおのれから渡ろうと決心できぬまま，共にゆっくりと自分たちをわけへだてる流れに沿って進んでゆきます。悲しげなまなざしを，この隔ての壁であるマインの河越しにかわし合いつつ。——(An Wilhelmine, 11. Oktober 1800[9])

おお，この丘の上から見たマイン峡谷の展望の何とすばらしかったことでしょう！丘も谷も河も，町々も村々も，すべては入りまじってまるで一枚の織りなされた絨たんのようです。マイン河はある時は右に，ある時は左にうねりつつ，ある時は一方の，ある時は他方のぶどう畠の丘にくちづけして流れ，自分にとって同じように大切な両岸の間で，どちらを選ぶべきか逡巡していました。それはまるで，父と母との間に立った子供のように。(An Wilhelmine, 11. Oktober 1800[10])

その詩的才能の目覚め，及びそれにともなう筆力，特に描写力の向上などのほかに，これらの例に共通してわれわれの注目をひくものは，自然を描くためのアレゴリーとして用いられている，夫婦の愛撫，友愛の情，子供をかこむ夫婦の姿，等々の要素，一言で言うならば，要するにエロス的なモメントであろう。つまり，クライストにとって，自然美への目覚め，自然描写，自然への感情移入といったことがらは，エロスとのかかわりあいなしには考えられなかったのである。これはどういうわけであろうか。

4

その直接の原因は，もちろん，この旅行の目的とかかわるものであると考えられる。すなわちこの奇怪なヴュルツブルク旅行が，その結果からみてのさまざまな効果は別として，そもそも本来は何のために行なわれたのか，については，はじめにも述べた通り，クライスト自身によるはっきりとした説明が残っていない上，真相を知っていた人々も，おそらく故意に，黙して語らなかったため，あくまで推測の域をでぬものながら，古くからいくつかの仮説が研究者の間で立てられてきた。それらは，それぞれに間接的ではあるが根拠もあって，決定的なことは今日もなお，言いがたいとはいえ，論を進める順序として，以下において簡単に，この旅行の目的とされているものを

列挙して考えてゆきたい。なお，この問題は，クライスト研究の歴史の上では，すでにほぼ論じつくされて久しいテーマとされているので,詳論を避け,箇條書きとすることを許されたく，各項目についての部分的補足説明は注に譲る。

4-1　まず，政治目的説。言葉をかえて申せば，クライスト特務機関員説とでもいうべき考え方の一分野である。これは直接には，クライストの腹違いの姉ウルリーケUlrikeが，後年その姪に語ったと伝えられる言葉を根拠としているが[11],その他にも，クライストがこの旅行出発直前，今日で言えば通産大蔵大臣に当るシュトルーエンゼーStruensee等と会見を重ねたり，旅行中，さまざまの工場，施設を視察していること，更にはクライスト自身が，彼特有の秘密めかした表現で，それらしいことを匂わせたりしていること，などから生まれた説であって，政治目的とまで極言せぬ研究者たちも，将来つくべき職業上の訓練の一環としての施設視察，つまり役人見習いていどの目的があったであろうことは認めている。しかし，このような理由が，ヴュルツブルク旅行全体の中で占める割合は微弱なものであった，というのが今日，大方の定説のようであり，筆者もそれにあえて異をとなえることはしないが，しかし，この旅行が，のちにも明らかになるように，クライストが一個の人間として内包していたさまざまの基本的問題を結集した形で露呈させ，彼の根源的体質をわれわれにかいまみさせてくれているという意味において，この旅行で，クライストが，はじめて意識的に社会的使命を果す仕事を負ったということは，記憶しておかねばならない。

かくて，これに代って登場する有力な仮説は，この旅行の直接目的をクライストの結婚問題に結びつけて考えようとするものである。これはクライスト自身の手紙に多くの暗示的な傍証を持つもので，要するに彼が当時，婚約の間柄にあった女性，ヴィルヘルミーネ・フォン・ツェンゲWilhelmine von Zengeに，自分との結婚生活に望むものは何か，と問うたところ，彼女が，立派な母親となって子供を育てたい，といった意味のことをおそらく答えたと思われるのである。この答は，結婚を前にした，あの時代の一人の少女としては全く当然で自然なものとわれわれには思われるのであるが，それを知るや，クライストは，自分には今，結婚する資格はない，しかしその資格を得よう，と一大決心をして，この旅行に出発，おそらく外科医ヴィルトや，その他ヴュルツブルク大学関係の医師たちの手により，10月10日の直前，又はその日までのある期間にわたって，何か決定的な治療が行なわれ，急にク

ライストは，結婚し，子供を生ませる能力を得たことと，事実なったか，少なくともクライスト本人は，なれたと思いこんだものと考えられる，というのが推定ながら，かなり信憑性のある事態の経緯である[12]。さて，ここから総括して

4-2　インポテンツ説が生まれる。これは，類似の諸説が散発しはじめたのち[13]，1899年，ゲーテ研究で著名なマックス・モリスMax Morrisが，はっきりと提唱したものであるが[14]，その論証に際しては，当時のヴュルツブルク大学医学部の講座スタッフにいたるまで調査されており，モリスの実証主義者の面目まことに躍如たるものがある。しかし一言でインポテンツと表現しても，その原因には，さまざまあり得るところから，この議論は，どの要素を原因として強調するかによって，更にいくつかに細分されるにいたった。

4-2-1　オナニー恐怖説。モリスの論文のどこにもこの単語，又はそれに類する語は使われていないが，彼は言外に明白にこの方向を主張する意見を述べ，ある悪習慣のため，廃人となった少年を，ヴュルツブルクのユーリウス病院でクライストが目撃し，大きな衝撃を受けた印象を述べた書簡を引証している[15]。従ってこの場合，ヴュルツブルクでクライストが受けた治療も，大部分は，心理療法であったわけである。この説は，グンドルフF.Gundolfや，シュテファン・ツヴァイクStefan Zweig等，著名な研究者によって支持された，最も有力なものである。

4-2-2　同性愛説。少年時代からの久しい軍隊生活の経験の必然的な結果として考えられるものであり[16]，この場合を想定するとしても，その治療法は，4-2-1と同じく，心理療法的性質のものであったと推測される。

4-2-3　性病説。クライストの長い軍隊生活，特に長期にわたり故郷をはなれてのライン遠征参加中の生活の荒廃を予想してたてられ得るものであるが，性病というものの性質や，それの治療に要する常識的な期間や，当時の医術の水準，又，クライスト自身の急激な治癒の宣言や歓喜などから，信憑性は最も薄いと思われる。このように単なる心理療法がほどこされたのではなかったとする考え方で，これよりも有力なのは，むしろ

4-2-4　包茎説，又は，それをも含めてひろく，性器欠陥説であろう。包茎はヨーロッパ人に特により多いとされる症状である上，手術とその経過が，短期間に，しかも明白に成功か失敗かの成果をともなっての勝負のものである点が，前記4-2-3説では不利にはたらいていた諸状況が，ここでは積極的に，肯定的要素として勘案され得るからである[17]。

以上の諸説のうち，一番可能性の多いのは，すでに述べきたところからも推測されるように，精神的心理的な病気ならば，オナニー恐怖説，外科手術を要する病気ならば包茎説であろうが，場合によっては，政治目的説をも含めて，上記諸説の二つ以上が重複していることも考えられ，結局のところ，真相は判然としない。しかしここでわれわれの論点にとり大切なことは，どれが原因であったにせよ，要するにこの旅行が，クライストの，(社会的成熟をも含めての）性的成熟のためのものであった，ということであり，従って，自然への目覚めの旅が，同時に，婚姻と生殖のための旅でもあった，という点である。クライスト自身，この10月10日直前と直後とで自然を見る目が変ったことを告白している。

わたしは，この町をとりまく地方の風景を，この町に到着したとき思ったより，はるかに今，快いところだと感じています。いやそれどころか，今はこの地方の風景が美しいと感じているとさえ申したいほどです。——それが，この地方の風景の方が変化したからなのか，それとも，それの印象を受けとる心の方が変化したためなのかは分りませんが。
(An Wilhelmine, 11. Oktober 1800[18])

5

ところで，このようなクライストの内面の変化は，彼のそれまでの書簡が証明しているように，婚姻への成熟の実現の予感に満ちた旅の途上から，すでに起っていたのであった。しかもそれは大自然への没入と，エロスへの没入の同一化を明らかに示しながらである。

9月4日，朝5時

おはよう，ミーンヒェン〔ヴィルヘルミーネの愛称(筆者)〕。昨日のお話では，いろいろ面白い話題を余りに急いでとばしてしまったから，その話を今日のうちに埋合わせしておきたいと思います。

プラウエン峡谷のまん中で谷が湾曲し，深い切り通しをなしています。ヴァイスリッツ河〔ヴァイセリッツ河のこと(筆者)〕は突き出した岩壁めがけて突進し，まるでそれに穴をうがたんばかりの勢いです。しかし岩はもっと強く，ゆるぎもせず，河の激流を曲げてしまうのです。

切り通しのようになった谷の，岩壁と流れとの間に，まるで一人の賢者のために作られたかのように，せまく，簡素な一軒の家が宙に浮くように建っています。背後の岩壁がその場所を保護し，屋根をおおう枝がうなずくよ

うに木蔭を家に贈り，ヴァイスリッツの波が涼気を家に送りとどけてくれます。上の方，谷への眺めはものすごく，下の方，ドレースデン平野への眺めは晴れやかです。ヴァイスリッツ河が，この場所を世間からへだて，唯一本の細い小径がその入口へと通じているだけです。——その家はせまい，とわたしはいったけれども，果してそうでしょうか。たしかに社交の集会や，仮装舞踊会をするにはせますぎましょう。しかし二人の人間と，愛とにとっては充分な広さです，充分すぎるくらいの広さではありませんか。

わたしは夢想にふけりました。わたしはわたしが住む部屋を，又，今ひとり別の女が住む部屋を，そしてわたしたち二人が一緒に住む三つ目の部屋を思いえがいておりました。わたしは母親が戸口の階段にすわり，子供がその胸にまどろんでいるさまを心に見ました。背後では男の子たちが岩壁によじのぼり，岩から岩へととびはねて大声で喚声をあげているのです。—ターラントのすばらしい峡谷で，わたしはとても感動しました。わたしは心からあなたがそばにいたらと思いました。このようにせまく，ひそやかな渓谷こそは愛にとってまことの祖国であります。このようなところでこそ，わたしたちはよろこびを，庭のあずまやの中などよりもっと高次なよろこびを満喫できるでしょう。それに，いつかこのような理想的な大自然の中でしばらく暮したら，きっとあなたの魂にすばらしい効果があるにちがいありません。というのも，崇高で高貴な被造物を見ることは，柔軟で感じやすい心には深い印象をあたえるものだからです。大自然はきっとあなたの内面に感情と思考とを目覚めさせるでしょう。そしてわたしはその思考を更に発展させるようつとめ，又，自分で新しい思考と感情とをかたち作ってゆくことでしょう。——おお，いつかわたしたちは二人でどこか美しい土地をたずねるべきです。というのも，そこには，わたしたちがまだ全々知らないような全く新しいよろこびがわたしたちを待っているからです。

このように，ほとんど何を見ても，遠い近いのちがいはあれ，何らかの関連であなたのことを，わたしのいとしい，愛すべき乙女よ，わたしは思い出さないではいられないのです。たとえわたしの精神が，一連の学問的な思考にふけっているため，あなたから離れるようなことがあっても，いつもわたしのチョッキのボタンにさがっているあなたの作ってくれたタバコ袋を一目見るだけで，たちまち又，思いはあなたの上にもどるのです。あるいは又，めったに脱がない，あなたの作ってくれた手袋や，あなたが

わたしの左腕にまいてくれた青いリボン，今もなお，ほどけず，まるでわたしたち二人の愛のきずなのように結びついているあの青いリボンを一目見るだけで，たちまち思いはあなたの上へともどるのです。
(An Wilhelmine, 4.September 1800[19])

6

しかも大切なことは，はじめにも少し触れたように，これらの自然との出逢いの描写が，クライストの，詩人としての目覚めにもつながっていたことである。このことは単に，今まで挙げきたった書簡からの引用例からもうかがわれるように，クライストがこの旅行において，にわかに筆の力をたかめたということの指摘にのみとどまるものではない。たとえば，

大自然の現象の中で，朝の雷鳴，それも特に鳴り終えてゆく時のさまほど，もの悲しげなよろこびをわたしに感じさせるものはありません。わたしたちはここで数日前，その光景を目撃したのです。——おお，それはすばらしい眺めでした。西の空に夜の雷雲がたちこめ，まるで暴君のように荒れ狂っていました。そして東の空からは太陽が，まるで英雄のように悠悠と，黙したまま登ってくるのでした。すると雷雲は，いなずまを太陽めがけてしゅっしゅっと投げつけ，雷鳴をとどろかせて太陽を大声でののしるのです。——神々しい星辰はしかし，一言も語らず登り来り，崇高なまなざしで足もとの騒ぐ霧を見おろし，まるで友人たちの心を落ちつかせようとでもするかのごとく，自分をとりかこむ星々を慰めのまなざしで見まわすのでした。——雷雲は，まるでこの一閃におのれの怨恨と憤怒とのありったけを吐き出そうとでもするかのように，最後のすさまじい雷鳴を太陽めがけて投げつけるのでしたが——しかし太陽はゆるぎなくおのれの軌道を進みゆき，恐れ気もなく天の玉座へと近づき，その席に座するのでありました。——すると狼狽したのか，顔色を失って，闇なす雲は色あせてゆき，薄いもやとなって四散し，わずかばかりの呪いの言葉を弱々しくつぶやきながら地平線のかなたへと沈んで行くのでありました。——
(An Wilhelmine, 11. Oktober 1800[20])

とあるこの文章を，クライストの最晩年，1811年の小説『聖ツェツィーリエ。別題，音楽の力(聖者伝説)』*Die heilige Cäcilie, oder Die Gewalt der Musik* (*Eine Legende*)の結びに近い場面で，発狂した四人のオランダ人兄弟の母親が，事件現場である，聖ツェツィーリエ修道院の礼拝堂をおとずれ

る場面の描写と比較しよう[21]。丁度，礼拝堂は改築中であった。

愉快な歌をうたいながら，何百人という職人たちが，細長く，いく重にも組み合わされた足場の上で，塔を今までよりも更にたっぷり三分の一は高くのばした上，それまではスレートぶきであった塔の屋根と小塔とを，頑丈で明るい色をし，太陽の光に輝く銅板にふきかえる仕事にかかっていた。そして，この建物の背後には，金色にふちどられた，まっ黒な雷雲が立っていた。それはすでに鳴り終えてアーヘン市の方向へと消えてゆくところであったのだが，その雷雲は更に二，三度，寺院のある方向めがけて，弱々しいいなずまを投げつけてのち，もやとなって四散しつつ，不満げなつぶやきを残して東の方へと沈んでゆくのであった[22]。

つまり，この旅行で，すでに最晩年のクライストの小説にあらわれるイメージ群は完成していたのであり，彼にとって，この自然との出逢いの旅行が，同時に，文学作品創作への旅でもあったことは明らかであろう。そしてこの推定を決定的にするものが，1800年11月13日，すなわち，ヴェルツブルク旅行から帰って直後のヴィルヘルミーネあての書簡にあらわれる，次の言葉なのである。

わたしは能力があると自負しています，それもたぐいまれな能力がある，と思うのです。——わたしがそう考えるわけは，どんな学問もわたしにとっては困難すぎはしないからなのです。すなわち，わたしはどんな学問についてもどんどん進歩しますし，自分の創意で多くのことを学んだものに付け加えることだってしてきたからなのです。——その上，また，わたしがそう考えるわけとして，人々が皆，わたしに，君にはその能力があると言ってくれるからでもあるのです。こういうわけで，要するにわたしは，そう信じているのです。かくて今や，わたしの未来には，一切の文筆活動の分野がひらかれることとなりましょう。この分野でわたしは，大いに仕事をしたいと感じています。(An Wilhelmine, 13. November 1800[23])

7

さて，婚姻と生殖への成熟，詩的創作活動力の成熟，更には，本論4-1，及び同じく4のための注12に引用した書簡の第三番目の個所から推定されるように，Staatsbürger，すなわち国民としての，それゆえ，ひろく社会的人間としての成熟をさえも含めての，これら三つの成熟が，共に大自然との出逢いにおいてなしとげられるという，このような力を持った自然の本質とは

一体，何であったのであろうか。

実は，これを説明する論拠は，長いヨーロッパの精神史の遺産の中に無数に存在するのであるが，今は，E.R.クルツィウスCurtiusが，その著『ヨーロッパ文学とラテン中世』の中の，『女神自然』*Göttin Natura*の章で，ヨーロッパにおける自然観の伝統に触れ，次のように述べている文章をもって，それらを代表させておこう。

「自然」は宇宙的な性的能力である。彼女はゼウスと神々の世界との間に位置して，婚姻と生殖を司り，嘆願を通じて歴史の流れに介入することができる。〔……〕彼女は太初より生きてきた万物の母である。父であり，母であり，乳母であり，養育者である。全知であり，万物を恵む者であり，万物を支配する者である。神々の調整者であり，形成する者であり，すべてに先立って生まれ出でた者である。永遠の生命であり，不滅の摂理である[24]。

そしてクルツィウスは，このような古代における自然観の伝統が，18世紀のドイツにおいて，まさにあの若きゲーテの中に引き継がれて行ったということを，有名な『自然にかんする断章』*Fragment über die Natur* と古代末期のオルペウスふうの賛歌との関連をあとづけつつ証ししてゆくのである。

それにしても，ここで描かれているものこそは，まさに，われわれが本論の各章において観察しきたったような自然観，すなわち，クライストが1800年に体験したあの自然観を説明するものではなかろうか。つまり，大自然は，婚姻の源，生殖の母，生産の衝動，そして歴史の形成者なのである。クライストにとって，又，ヨーロッパ人にとって，大自然との出逢いとは，この生産力との出逢いに他ならなかったのである。クライストにとって，子供をつくること，詩をつくること，そして歴史をつくることとは，すべて同じ根源から発する仕事なのであった。1802年5月1日，姉ウルリーケにあてた書簡の中で，クライストが，

要するに，次の三つのことがらが成功したら，もはやわたしは死ぬ以外何の望みもありません。すなわちそれは，一人の子供，一篇の詩作品，そして一つの大いなる行動であります[25]。

と告白している，あの有名な箇所の意味は，われわれが解明しきたったクライストの，この自然体験の観点に立って解釈する時，明快に説明されつくして，なお余りあるのではなかろうか。

8

以上をもって，この小論が本来，提出し，その回答を求めようとした課題についての論述は終るのであるが，最後に，いわばAusblickとして，すなわち今後の研究課題への展望として，この主題がクライストの作家論にとって，どのような意味を持つかを明らかにしておきたいと思う。但し，これは未だ論証の形をとるものではなく，あくまで筆者のクライストに関する研究仮説の一環としての推論的記述の域を出るものではないことをあらかじめことわっておかねばならぬ。

さて，問題点を具体的に申せば，クライストは，では，その後，間もなくはじまったその創作活動においても，このような大自然との合一の境地に立ち続けていたであろうか，シラーの言葉を借りるならば，彼クライストはnaivな詩人として出発したのであろうか，との問いである。そしてその答は周知の通り否であって，クライストはこの旅行ののち，大自然と真理から乖離した人類の世界へと急速に没入してゆくのであり，われわれはその転機となるものとして，直ちに，いわゆる「パリ体験」と「カント危機」とを挙げることができるのである。この両体験そのものについての論究は，稿を改めて行なわれねばなるまいが，今は図式化して表現することが許されるならば，すなわち，これ，一方は啓蒙思想の具現化としての革命下のパリにおける反自然と腐敗を目撃しての失望感であり，他方は，人間の真理到達不能という絶望感，と要約できよう。こうして，一般にクライストはsentimentalischな詩人として位置づけられてきた[26]。

しかしながら，大自然との根源的合一にもとずいた世界と人類という発想も，クライストにおいては決して消滅したのではなく，7の最後に引用した書簡からも知られる通り，1802年5月にいたるもなお持続せられていたのである。しかもそれは，人類の自然や真理からの乖離という，今一つの対立的発想と，必ずしも相互に止揚，発展，あるいは相剋，克服，といった関係を持つことなく，両者共に併存し，あたかも同一次元の世界にいるかのように交流するのである。ここにクライストの作家像，また世界像の特異性があるのであって，彼において，発展とか，克服とかいったことを問題にする時，われわれが最も注意深くあらねばならぬ理由もここにあるのである。クライストの場合は，むしろ，あらゆる要素が，はじめから彼のうちに併存しており，それらのある一つが発露するや，同時に対立する他の一つも直ちに発露して

併存の形で一個の独立世界を形成する，という，(強いていえば) 発展現象，あるいは克服成長現象を示すのを特色としている。従って単なるディアレクティクという定義も当らないのであって，あえて表現するならば，奥行きのない平面的世界像，パースペクティヴなき絵画とでも申すべき世界像が現出するのである。はじめであると同時に終りでもある世界，終末において停止した世界とでもいい得ようか。童話世界や怪奇文学世界の像に一脈相通じている。そしてわれわれの主題の場合に，これをあてはめて表現すれば，「パリ体験」と「カント危機」とは，まさにそういうクライストの内面のメカニズムに応じて，「ヴュルツブルク旅行」に対立併存する要素として必然的に生じたものなのであった。極論すれば「ヴュルツブルク旅行」は，「パリ体験」，「カント危機」を得て，はじめて真のクライスト的絵画の一方の主役となり得たのであり，逆もまた然りと言えよう。

テクストとドキュメント

Heinrich von Kleist, *Sämtliche Werke und Briefe in 2 Bden.* Hrsg. von Helmut Sembdner. Carl Hanser Verlag, München [5] 1970. (zit. *SW*)

Heinrich von Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen. Hrsg. von Helmut Sembdner. Carl Schünemann Verlag, Bremen, zweite, veränderte und erweiterte Auflage o.J. (© 1957, Printed in Germany 1964) (=Sammlung Dieterich, Bd. 172) (zit. *LS*)

Heinrich von Kleist, *Geschichte meiner Seele/Ideenmagazin. Das Lebenszeugnis der Briefe.* Hrsg. von Helmut Sembdner. Carl Schünemann Verlag, Bremen o.J. (©1959) (=Sammlung Dieterich, Bd. 233) (zit. *GmS*)

注

1　特にクライストと自然との関係を中心主題とした論考としては，Annelies Grob, *Die Bedeutung der Natur in Kleists Leben und Werk.* Diss. Zürich 1954. があり，また，この論文を実存主義的研究方法の立場から批判的にとりあつかったものとしては，最近亡くなったHeinz Ideの著書，*Der junge Kleist. Holzner Verlag,* Würzburg o.J. (©1961) がある。いずれも論点は，この小論の目的とするところとは方向が異なるけれども，参照し，益するところ多大であった。更に，Grobと類似の方向

の研究として, Hans Horst Brügger, *Die Briefe Heinrich von Kleists.* Diss. Zürich 1946. もよく知られたものの一つのようだが, 未見である。

2 Z. B. Grob, *ebenda*, besonders S. 2 ff.

3 Z. B. Hans M. Wolff, *Heinrich von Kleist. Die Geschichte seines Schaffens.* Francke Verlag, Bern o. J. (©1954), S. 103ff.

4 Vgl. Heinz Ide, *Der junge Kleist. „... in dieser wandelbaren Zeit...“* Holzner Verlag, Würzburg o. J. (©1961), S. 181ff.

5 ルードヴィヒ・フォン・ブローケス (1768—1815) とクライストは, 1796年, リューゲンRügenで知りあった。この人物はクライストのヴュルツブルク旅行の秘密の詳細を熟知していたと思われる唯一人の人物である。なお, この名前の綴りと発音であるが, クライストは書簡の中で, BrockesとBrokesの両方を混じて用いている。正しくはやはり, Brockesであろうが, 発音は〔'bro:kəs〕と長音で読まれていたらしい。ファルンハーゲン・フォン・エンセVarnhagen von Enseに, 次の証言が残っているからである。「このBrockes氏は, ——彼自身は時々, 発音にふさわしくBrokesとも書いていたが——クライストの親友であったのみならず〔……〕」(*LS*, S29, Nr.43a)

6 この名前はアナグラムの一種で, 中にKleistの六文字が伏せてある。彼自身がそのことを1800年9月1日付の婚約者にあてた書簡の中で*Klingstedt*と図解してみせたのち, 更に追って書きとして,「いつの日か, あなたの手元に, クリングシュテットなる男からの手紙があるのを見つけたら, クライスト君はどんな顔をするでしょうね。」と冗談まで付け加えている。(Vgl. *SW*, Bd. II, *S*.537f.)

7 目的地変更の理由は, ドレースデン駐在の英国大使エリオットElliotから, ヴィーンが政治的不安の状態にあり, ヴィーンへの交通路の治安状況がフランス軍の進撃のため悪化しているとの情報を得たためとされる。またヴュルツブルクのみでなく, シュトラースブルクもヴィーンにかわる候補地として挙がっていた。(Vgl. Kleists Brief an Wilhelmine, 3. September 1800. *SW*, Bd.II, S.542)

8 Besonders ein Schauspiel ist mir sehr merkwürdig. Gradeaus strömt der Main von der Brücke weg, und pfeilschnell, als hätte er sein Ziel schon im Auge, als sollte ihn nichts abhalten, es zu erreichen, als wollte er es, ungeduldig, auf dem kürzesten Wege ereilen – aber ein Rebenhügel beugt seinen stürmischen Lauf, sanft aber mit festem Sinn, wie eine Gattin den stürmischen Willen ihres Mannes, und zeigt ihm mit edler Standhaftigkeit den Weg, der ihn ins Meer führen wird – und er ehrt die bescheidne Warnung und folgt der freundlichen Weisung, und gibt voreiliges Ziel auf und durchbricht den Rebenhügel nicht, sondern umgeht ihn, mit beruhigtem Laufe, seine blumigen Füsse ihm küssend – (An Wilhelmine von Zenge, 11. Oktober 1800. *SW*, Bd. II, S.579)

9 Die Höhe senkt sich allmählich herab und in der Tiefe liegt die Stadt. Von beiden Seiten hinter ihr ziehen im halben Kreise Bergketten sich heran, und nähern sich freundlich, als wollten sie sich die Hände geben, wie ein paar alte Freunde nach einer lange verflossenen Beleidigung – aber der Main tritt zwischen sie, wie die bittere Erinnerung, und sie wanken, und keiner wagt es, zuerst hinüber zu schreiten, und folgen beide langsam dem scheidenden Strome, wehmütige Blicke über die Scheidewand wechselnd – (An Wilhelmine von Zenge, 11. Oktober 1800. *SW*, Bd. II, S.579)

10 O wie herrlich war der Anblick des Maintales von dieser Höhe! Hügel und Täler und Wasser, und Städte und Dörfer, alles durcheinander wie ein gewirkter Fussteppich! Der Main wandte sich bald rechts bald links, und küsste bald den einen, bald den andern Rebenhügel, und wankte zwischen seinen beiden Ufern, die ihm gleich teuer schienen, wie ein Kind zwischen Vater und Mutter. (An Wilhelmine von Zenge, 11. Oktober 1800, *SW*, Bd. II. S.580f.)

11 コーベルシュタインによる伝承（1860年）

〔ウルリーケあての〕書簡を見ても，この旅行，すなわちクライストがブローケス氏と一緒にヴィーンへむけて行なおうとし，のち二人をヴュルツブルクへと連れて行くこととなった，この旅行の目的と成果について何らの解明も得ることができないので，私はこの点につき満足ゆく回答が一番期待できるところ，すなわち，H.v.クライストが姉にあてた書簡のオリジナルの現在の所有者，つまりクライストとその姉との姪〔フリーデリーケ・フォン・パンヴィッツFriederike von Pannwitz〕に問合わせた。しかし彼女も私に対し次のこと以上は伝えてくれることはできなかった。すなわち，彼女の叔母は彼女にこう言ったという「あの旅行は，政治的な性格のものでした」と。（*LS*, S.28, Nr.40）

尚，一般にクライストの生涯における個々の行動には理解しがたい部分が多い上，ある期間，完全に消息を絶って行方不明になってみたり，更には過激な反ナポレオン，反フランス的言動があるかと思えば，逆にフランス陣営に身を投じるジェスチュアもある。要するに当時のむずかしい政治情勢のもとで生きぬいた人々（たとえばFr.シュレーゲルや，アーダム・ミュラーなど）共通の複雑怪奇な側面をクライストも持っていたことが，さまざまの臆測を許す原因になっていることは否めない。

12 傍証とされる中心的なものは，1800年10月10日付の書簡であるので，そこから，当該個所を三ヶ所引証しておく。

そうだ，今日はわたしの誕生日です。今日，あなたの心が，ひそかにわたしのために思ってくれている願いがまるで聞こえてくる思いがします。そして，そうした願いすべてを，いちどきにわたしに伝える，あなたの手の握手の力を感ずる思いがするのです。そ

うだ，きっとそれらの願いはすべて満たされるでしょう。どうか確信していて下さい。わたしは確信しているのですから。

Ja, mein Geburtstag ist heute, und mir ist, als hörte ich die Wünsche, die heute Dein Herz heimlich für mich bildet, als fühlte ich den Druck Deiner Hand, der mir alle diese Wünsche mit einemmale mitteilt. Ja sie werden erfüllt werden alle diese Wünsche, sei davon überzeugt, ich bin es. (An Wilhelmine von Zenge, 10. Oktober 1800. *SW*, Bd. II, S.574)

たしか，いつであったか，わたしに書いてくれるよう，あなたにたのんだことがあったでしょう。一体，あなたはそもそも，将来の結婚生活の幸せについて，どのような期待を抱いているのかについて。——なぜそんなことをたのんだか，あなたは推測がつきませんか。いやいや，どうしてあなたにそんなことを推測できるはずがありましょう。——わたしはあの，あなたの作文を待ちこがれているのだが，いまだにヴィーンから着かないのです。あなたがわたしにくれた作文の第一枚目，あれは，わたしに，口では言えないほどの，しかし，にが甘いよろこびをあたえてくれたのであり，そのためにわたしは，あなたの腕にいだかれるのを，はばかり，逃がれ，この旅立ちを急ぐこととなったのです。まだあなたはおぼえていますか。わたしが別れる前の日，あの第一枚目を，どんなに感動して通読し，どんなに不安な思いで家へ持ちかえったかを。——また，わたしが，あの紙を手に一人になった時，どんなさまざまの思いを感じたか，御存知でしょうか。あの紙片こそ，わたしの心全体を，あなたへとひきよせると同時に，しかし何としても，わたしをあなたの腕の中から追いたてるものであったのです。——今，もし，あれを読みかえしたなら，それは問題なくあなたの腕の中へと，わたしをつれもどしてくれることとなりましょうに。でも当時は，わたしはあなたにふさわしい人間ではなかったのです。今はしかし，ふさわしくなりました。当時，わたしはあなたが，こんなにも善良で，こんなにも気高く，こんなにも尊敬に価する人であり，至福を享けるにふさわしい人であることをなげいて涙したのですが，今はそれが，わたしの誇りであり，わたしの歓喜となりましょう。当時はあなたの至福の望みを満たすことができぬという意識にわたしは苦しんだのですが，今は，今こそは——いや，言わないでおきましょう！

Ich ersuchte Dich doch einst mir aufzuschreiben, was Du Dir denn eigentlich von dem Glücke einer künftigen Ehe versprächst? – Errätst Du nicht, warum? Doch wie kannst Du das erraten! – Ich sehe mit Sehnsucht diesem Aufsatz entgegen, den ich immer noch nicht von *Wien* erhalten habe. Sein erstes Blatt, das Du mir mitteiltest, und das mir eine unaussprechliche, aber bittersüsse Freude gewährte, scheuchte mich aus Deinen Armen und beschleunigte meine Abreise. Weisst Du wohl noch mit welcher Bewegung

ich es am Tage vor unsrer Trennung durchlas, und wie ich es unruhig mit mir nach Hause nahm – und weisst Du auch was ich da, als ich allein war mit diesem Blatte, alles empfand? Es zog mein ganzes Herz an Dich, aber es stiess mich zugleich unwiderruflich aus Deinen Armen – Wenn ich es jetzt wieder lesen werde, so wird es mich dahin zurückführen. Damals war ich Deiner nicht würdig, jetzt bin ich es. Damals weinte ich, dass Du so gut, so edel, so achtungswürdig, so wert höchsten Glückes warst, jetzt wird es mein Stolz und mein Entzücken sein. Damals quälte mich das Bewusstsein, Deine heiligsten Ansprüche nicht erfüllen zu können, und jetzt, jetzt —— Doch still! (An Wilhelmine von Zenge, 10. Oktober 1800. *SW.* Bd. II, S.575f.)

では，わたしたち二人は手に手をとり合って，わたしたちの目標，すなわち，おのおのは最も手近かにある目標に向って，そしてわたしたち二人は，わたしたち二人が目指す最終目標に向って，進みゆきましょう。あなたの最も手近かの目標は，自己を母親に，わたしのそれは，自己を，一人の国民に教化することでなければなりません。そしてわたしたち二人が目指し，わたしたち二人が互いに確言してやまぬ更なる目標こそは，愛の幸せでありますように。

ではおやすみ，ヴィルヘルミーネ，わたしのいいなずけよ，未来のわが妻，未来のわが子らの母よ。

Und so lass uns denn beide, Hand in Hand, unserm Ziele entgegen gehen, jeder dem seinigen, das ihm zunächst liegt, und wir beide dem letzten, nach dem wir beide streben. Dein nächstes Ziel sei, *Dich zu einer Mutter,* das meinige, *mich zu einem Staatsbürger* zu bilden, und das fernere Ziel, nach dem wir beide streben, und das wir uns beide wechselseitig sichern können, *sei das Glück der Liebe.*

Gute Nacht, Wilhelmine, meine Braut, einst meine Gattin, einst die *Mutter* meiner Kinder! (An Wilhelmine von Zenge, 10. Oktober 1800. *S.W.* Bd. II, S.578)

13 Vgl. S. Rahmer, *Das Kleist-Problem, auf Grund neuer Forschungen zur Charakteristik und Biographie Heinrich von Kleists.* Druck und Verlag von Georg Reimer, Berlin 1903, S.57ff.

14 Max Morris, *Heinrich von Kleists Reise nach Würzburg.* Verlag von Conrad Skopnik, Berlin 1899.

15 *Ebenda,* S.27 ff. 尚，この書簡の個所はオナニー恐怖説の証拠の中心的なものの一つでもあるので，ここに引用しておこう。

だが，一番おそろしかったのは，ある自然に反する悪習慣のために発狂してしまった人

の光景でありました。——つい最近まで，輝くばかり美しかったということであり，まだその痕跡をとどめている18歳の青年が，そこに，汚物受けの上にしゃがんでいたのです。四肢はむき出しで，色つや悪く，やせこけており，胸はおちこみ，こうべは力なく垂れて。——まるで結核患者のように，にごって血管の浮いた赤味が，ひとはけ，死人のように白っぽい彼の顔の上に掃かれており，まぶたは，衰えて，どんよりとくもった目の上に力なくたれさがり，わずかばかり残った，かさかさの，老人のような毛髪が，早くして白くなったこうべをおおっていました。からからになり，渇き，水を求めてあえぎつつ，舌は，灰色の，しわだらけにちぢんだ唇の上に垂れ下っていたのです。彼の両手は背中でしばりあげ，縫いこめてありました。——彼はしゃべるために舌をうごかす能力もなく，その臭い息を吐く力さえもあるかなしかでありました。——彼の脳神経は狂っているわけではなかったのですが，無感覚となり，完全に力を失い，自己の魂の命令に従う能力をなくしており，彼の全生活は，これ，ひたすら，永遠の麻痺した無力感以外の何物でもなかったのです。——おお，このような人生を一回送るくらいなら，むしろ何千回も死んだ方がましです！このようにおそろしい報復を，自然は，おのれの意志に反した不遜の行為に対して行なうのです。おお，このようなおそろしい光景を語るのはもうやめましょう！——

Aber am Schrecklichsten war der Anblick eines Wesens, den ein unnatürliches Laster wahnsinnig gemacht hatte – Ein 18jähriger Jüngling, der noch vor kurzem blühend schön gewesen sein soll und noch Spuren davon an sich trug, hing da über die unreinliche Öffnung, mit nackten, blassen, ausgedorrten Gliedern, mit eingesenkter Brust, kraftlos niederhangendem Haupte – Eine Röte, matt und geadert, wie eines Schwindsüchtigen, war ihm über das totenweiße Antlitz gehaucht, kraftlos fiel ihm das Augenlid auf das sterbende, erlöschende Auge, wenige saftlose Greisenhaare deckten das frühgebleichte Haupt, trocken, durstig, lechzend hing ihm die Zunge über die blasse, eingeschrumpfte Lippe, eingewunden und eingenäht lagen ihm die Hände auf dem Rücken – er hatte nicht das Vermögen die Zunge zur Rede zu bewegen, kaum die Kraft den stechenden Atem zu schöpfen – nicht verrückt waren seine Gehirnsnerven aber matt, ganz entkräftet, nicht fähig seiner Seele zu gehorchen, sein ganzes Leben nichts als eine einzige, lähmende, ewige Ohnmacht – O lieber tausend Tode, als ein einziges Leben wie dieses! So schrecklich rächt die Natur den Frevel gegen ihren eignen Willen! O weg mit diesem fürchterlichem Bilde – (An Wilhelmine von Zenge, 13. September 1800. *SW.* Bd. II, S.560f.)

又，治療は，医師が規則的にクライストを下宿先に往診して行なわれていたらしいこと

も判っている。(Vgl. M.Morris, *ebenda* S.15)

16 クライストの場合，特に三歳年下の戦友，リューレ・フォン・リーリエンシュテルン Rühle von Lilienstern との関係をめぐって，この傾向が各所で指摘され得るほか，一般的にも，たとえば，クライストの著名なエッセイ*Über das Marionettentheater* 中の，水あびからあがった少年の美しさ，その美しさのたとえとしての，そげ(Splitter)をぬく少年の像(*SW*, Bd II, S.343. なお参考までに，この姿は，同性愛をあつかった小説として有名な，トーマス・マンThomas Mannの*Der Tod in Venedig*の中に，同じく，水あびからあがった少年美の姿としてあらわれ，また，少年の魅力の比喩としても，Dornauszieher，すなわち「とげを抜く若者」という言葉が使われていることはよく知られている。Vgl. Thomas Mann, *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden.* S. Fischer Verlag, Frankfurt a.M. [2]1974. Bd. VIII: *Erzählungen*, S.470,478 u.ö.)などに普遍的なイメージとしてあらわれる。

17 Vgl. Rahmer, *a.a. O., S.* 63f.

18 Ich finde jetzt die Gegend um diese Stadt weit angenehmer, als ich sie bei meinem Einzuge fand; ja ich möchte fast sagen, daß ich sie jetzt schön finde – und ich weiß nicht, ob sich die Gegend verändert hat, oder das Herz, das ihren Eindruck empfing. (An Wilhelmine von Zenge, 11. Oktober 1800. *SW*, Bd. II, S.578f.)

19 den 4. September, morgens 5 Uhr

Guten Morgen, Minchen. Ich bin gestern bei meiner Erzählung zu rasch über manchen interessanten Gegenstand hinweggegangen und ich will das heute noch nachholen.

In der Mitte des *Plauenschen* Grundes krümmt sich das Tal und bildet da einen tiefen Einschnitt. Die *Weissritz* stürzt sich gegen die Wand eines vorspringenden Felsens und will ihn gleichsam durchbohren. Aber der Felsen ist stärker, wankt nicht, und beugt ihren stürmischen Lauf.

Da hangt an dem Einschnitt des Tales, zwischen Felsen und Strom, ein Haus, eng und einfältig gebaut, wie für einen Weisen. Der hintere Felsen gibt dem Örtchen Sicherheit, Schatten winken ihm die überhangenden Zweige zu, Kühlung führt ihm die Welle der Weissritz entgegen. Höher hinauf in das Tal ist die Aussicht schauerlich, tiefer hinab in die Ebene von Dresden heiter. Die *Weissritz* trennt die Welt von diesem Örtchen und nur ein schmaler Steg führt in seinen Eingang. – Eng sagte ich, wäre das Häuschen? Ja freilich, für Assembleen und Redouten. Aber für 2 Menschen und die Liebe weit genug, weit hinlänglich genug.

Ich verlor mich in meinen Träumereien. Ich sah mir das Zimmer aus, wo

ich wohnen würde, ein anderes, wo jemand anderes wohnen würde, ein drittes, wo wir beide wohnen würden. Ich sah eine Mutter auf der Treppe sitzen, ein Kind schlummernd an ihrem Busen. Im Hintergrunde kletterten Knaben an dem Felsen, und sprangen von Stein zu Stein, und jauchzten laut

In dem reizenden Tale von *Tharandt* war ich unbeschreiblich bewegt. Ich wünschte recht mit Innigkeit Dich bei mir zu sehen. Solche Täler, eng und heimlich, sind das wahre Vaterland der Liebe. Da würden wir Freuden genossen haben, höhere noch als in der Gartenlaube. Und wie herrlich müsste einmal ein kurzes Leben in der idealischen Natur auf Deine Seele wirken. Denn tiefe Eindrücke macht der Anblick der erhabenen edlen Schöpfung auf weiche, empfängliche Herzen. Die Natur würde gewiss das Gefühl und den Gedanken in Dir erwecken; ich würde ihn zu entwickeln suchen und selbst neue Gedanken und Gefühle bilden. – O, einst müssen wir einmal *beide* eine schöne Gegend besuchen. Denn da erwarten uns ganz neue Freuden, die wir noch gar nicht kennen.

So erinnert mich fast jeder Gegenstand durch eine entfernte oder nahe Beziehung an Dich, mein liebes, geliebtes Mädchen. Und wenn mein Geist sich einmal in einer wissenschaftlichen Folgenreihe von Gedanken von Dir entfernt, so führt mich ein Blick auf Deinen Tobaksbeutel, der immer an dem Knopfe meiner Weste hangt, oder auf Deine Handschuh, die ich selten ausziehe, oder auf das blaue Band, das Du mir um den linken Arm gewunden hast, und das immer noch, unaufgelöst, wie das Band unserer Liebe, verknüpft ist, wieder zu Dir zurück. (An Wilhelmine von Zenge, 4. September 1800. *SW*, Bd. II, S.545f.)

20 Aber keine Erscheinung in der Natur kann mir eine so wehmütige Freude abgewinnen, als ein Gewitter am Morgen, besonders wenn es ausgedonnert hat. Wir hatten hier vor einigen Tagen dies Schauspiel – o es war eine prächtige Szene! Im Westen stand das nächtliche Gewitter und wütete, wie ein Tyrann, und von Osten her stieg die Sonne herauf, ruhig und schweigend, wie ein Held. Und seine Blitze warf ihm das Ungewitter zischend zu und schalt ihn laut mit der Stimme des Donners – er aber schwieg der göttliche Stern, und stieg herauf, und blickte mit Hoheit herab auf den unruhigen Nebel unter seinen Füssen, und sah sich tröstend um nach den andern Sonnen, die ihn umgaben, als ob er seine Freunde

beruhigen wollte – Und einen letzten fürchterlichen Donnerschlag schleuderte ihm das Ungewitter entgegen, als ob es seinen ganzen Vorrat von Galle und Geifer in einem Funken ausspeien wolte – aber die Sonne wankte nicht in ihrer Bahn, und nahte sich unerschrocken, und bestieg den Thron des Himmels –– und blass, wie vor Schreck, entfärbte sich die Nacht des Gewölks, und zerstob wie dünner Rauch, und sank unter den Horizont, wenige schwache Flüche murmelnd –– (An Wilhelmine von Zenge, 11. Oktober 1800. *SW.* Bd. II. S.581).

21 Vgl. *GmS,* S.121.

22 Viele hundert Arbeiter, welche fröhliche Lieder sangen, waren auf schlanken, vielfach verschlungenen Gerüsten beschäftigt, die Türme noch um ein gutes Dritteil zu erhöhen, und die Dächer und Zinnen derselben, welche bis jetzt nur mit Schiefer bedeckt gewesen waren, mit starkem, hellen, im Strahl der Sonne glänzigen Kupfer zu belegen. Dabei stand ein Gewitter, dunkelschwarz, mit vergoldeten Rändern, im Hintergrunde des Baus, dasselbe hatte schon über die Gegend von Aachen ausgedonnert, und nachdem es noch einige kraftlose Blitze, gegen die Richtung, wo der Dom stand, geschleudert hatte, sank es zu Dünsten aufgelöst, missvergnügt murmelnd in Osten herab. (*SW,* Bd. II. S.225)

なお，かつては，この点も根拠の一つとなって，『聖ツェツィーリエ』という作品は，若い時代の手法や，同一表現のくりかえしに支えられた，従って，すでにクライストの筆力の衰えを示すものである，とする考え方が強かった。(Vgl. Otto Brahm, *Das Leben Heinrichs von Kleist.* Egon Fleischel & Co., Berlin, neue Ausgabe 1911, S. 416f.) しかし，クライストの生涯と，その創作活動に関して，普通の意味での，いわゆる発展という現象を問題にすることには，そもそも疑点があるのであって，8においてAusblickとして触れるように，この小論がクライストのヴュルツブルク旅行を素材として主張しようとする事柄も，まさにその一事なのである。

23 Ich bilde mir ein, dass ich Fähigkeit habe, seltnere Fähigkeiten, meine ich – Ich glaube es, weil mir keine Wissenschaft zu schwer wird; weil ich rasch darin vorrücke, weil ich manches schon aus eigener Erfindung hinzugetan habe – und am Ende glaube ich es auch darum, weil alle Leute es mir sagen. Also kurz, ich glaube es. Da stünde mir nun für die Zukunft das ganze schriftstellerische Fach offen. Darin fühle ich, dass ich sehr gern arbeiten würde. (An Wilhelmine von Zenge, 13. November 1800. *SW,* Bd. II, S.587)

もちろん，ここでいわれている文筆活動が，たとえば，学者としてのそれではなく，作

家としての活動であると断言することはできない。しかし，おのれの筆力による自立の確信をクライストが得たとすることには異論はないであろう。

24　Natura ist kosmische Potenz. Sie steht zwischen Zeus und der Götterwelt, waltet über Ehe und Zeugung und kann durch die Klage in den Geschichtsverlauf eingreifen. [...] Sie ist die uralte Allmutter; Vater, Mutter, Amme, Nährerin; allweise, allschenkend, allherrschend; Ordnerin der Götter; Bildnerin; Erstgeborene; ewiges Leben und unsterbliche Vorsehung. (Ernst Robert Curtius, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter.* Francke Verlag, Bern, zweite, durchgesehene Auflage 1954, S.116)

なお，日本語訳は，E.R.クルツィウス　ヨーロッパ文学とラテン中世　南大路振一他訳　みすず書房　東京　1971年　153ページ以下　によりつつも，一部変更を加えたことをことわっておく。

25 [...] kurz, ich habe keinen andern Wunsch, als zu sterben, wenn mir drei Dinge gelungen sind: ein Kind, ein schön Gedicht, und eine grosse Tat. (An Ulrike von Kleist, 1.Mai 1802, *SW*, Bd. II, S.725)

Vgl. z.B. Hanna Hellmann, *Heinrich von Kleist. Darstellung des Problems.* Carl Winters Universitätsbuchhandlung, Heidelberg 1911, S.69.